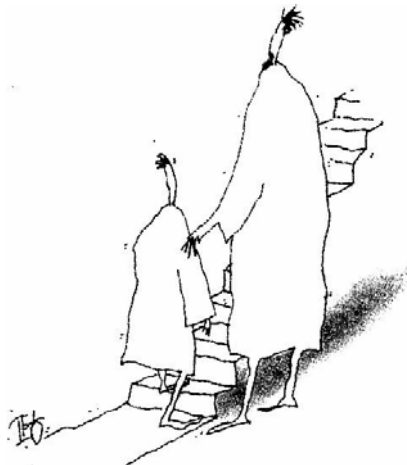


養育係

第2編7章

律法が与えられた目的はそれで旧約の民をつなぎとめておくためではなく、キリストにある救いの望みを彼らの内にその方が来られるまではぐくむためです



律法はキリストが来られるまで旧約の民の心を整えさせ、彼らの内にキリストを待ち焦がれる心を強めさせ、たとえその時が長引いたとしてもキリストに対する望みが失われないうようにさせるためのものでした。ここで律法と言われているのはモーセの宗教の全体と十戒を中心とする道徳法、そして各種の民事法、裁判法、儀式法などを意味しています。

古代ギリシャ人やローマ人の家庭には特別な奴隷がいました。主人の家の16歳以下の子を任せられて、彼らに教育を施す役目を担った奴隷たちでした。彼らは主人の子供たちを学校に連れて行き、彼らが正しく行動するように訓練し、指導しました。「パイダゴコス」と呼ばれた人たちです。彼らは委ねられた子供たちが成人(16歳)するまで、そのような役目を果たしたのです。使徒パウロは律法をこの奴隷たちのような働きをする養育係のようなものと説明しています(ガラテヤ3:24)。なぜそのように彼は言ったのでしょうか。今回は神が旧約の民と私たちに律法を与えてくださった目的について学んでみましょう。

第1節 律法は罪人をキリストに導く養育係です

律法は約束に関してまだ子供のような旧約の民をよく訓練して、指導し、約束されたキリストに導く養育係でした(ガラテヤ3:24)。律法はキリストが来られるまで旧約の民の心を整えさせ、彼らの内にキリストを待ち焦がれる心を強めさせ、たとえその時が長引いたとしてもキリストに対する望みが失われないうようにさせるためのものでした。ここで律法と言われているのはモーセの宗教の全体と十戒を中心とする道徳法、そして各種の民事法、裁判法、儀式法などを意味しています。

律法に示された儀式法はそのひとつひとつがみな私たちをキリストに導く目的を持っています。イスラエルの民はそれを知らなかったため、ただその形式だけを守ることこだわってしまいました。本来の目的を見失って形だけで神に仕えたことは、ちょうど悪臭を放つ油と気分を悪くさせるような獣の血で神と和解しようとするような愚かでとんでもない行為だったのです。神の本

性は霊的なものですから霊的な礼拝だけが神を喜ばせることができるはずなのです。

それでは霊的な礼拝とは何でしょうか。律法の形式ではなく、その形式が表そうとしている真理、その心で礼拝をすることです。律法の礼拝形式はひとつひとつすべて真理を表していますし、その真理を予め示す模型なのです。それではその真理とは何でしょうか。神の約束です。イエス・キリストにある真理、つまり私たちの救いについての約束なのです。

それでヘブライ人への手紙の著者は4章から11章までで旧約のすべての儀式はキリストが来られるまでだけに与えられたものだと教えています（ヘブライ 9：9～12）。その役割はキリストが来られてその儀式の意味を完全に成就してくださるまでだけと言う明らかな限界を持ったものなのです。使徒パウロもキリストが律法の目標であると強調しています（ローマ 10：4）。このように旧約の律法は私たちがキリストに導く養育係なのです。

第2節 誰も律法を守ることはできません

神が私たちに道德律法を与えられた目的は何でしょうか。私たちがそれを守るようにと与えられたものなのでしょうか（申命記 30：19）。しかし事実は、私たちの口を閉じさせるためのものでした。聖なる律法の前立って誰も弁明することができないようにさせるのです。なぜなら誰も律法を守ることができないためです。罪人は律法に近づけば近づくほど死の近くに置かれている自分の姿を悟らされるのです。誰も律法の呪いから逃れることはできません（ガラテヤ 3：10）。

信じる者であっても死の体をまとっているために心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして（マルコ 12：30）神を愛そうとしても、誰もこの完全な愛の目標に到達することはできません。肉の思いと言う病にかかっていない人がどこにいるのでしょうか。腐敗した肉体を脱ぎ捨てることができない私たちは誰も律法の完全性には近づくことさえできないのです（コヘレト 7：20、詩 143：2、ヨブ 9：2、ガラテヤ 5：17、3：10、申命 27：26）。

それならば誰が救われることができるのでしょうか。むかし、イエスの弟子たちが発したこの問いが私たちにも生まれてくるはずですが、主イエスはこのように答えられました。「弟子たちはこれを聞いて非常に驚き、「それでは、だれが救われるのだろうか」と言った。イエスは彼らを見つめて、「それは人間にできることではないが、神は何でもできる」と言われた」（マタイ 19：25、26）。誰も律法を守ることはできませんが、律法には神が求められる者たちに律法の要求を満足させることができるようにしてくださるという神の約束がこめられているのです。律法は確かに私たちがその約束に導く誠実な養育係なのです。

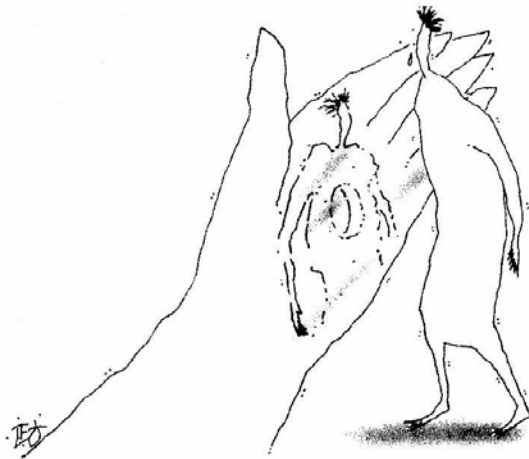
第3節 律法の三つの働き

神が私たちに道德律法を与えられた目的は何のためなのでしょう。道德律法の機能はいったい何なのでしょう。道德律法が果たす働きは次の三つです。

第一の機能は私たちの被っている傲慢の仮面を剥ぎ取るためです。神の義を明らかに示して、私たちが持っている不義を一つ一つ明らかにして、数え切れない罪が自分の内にうごめいていることを悟らせるようにするのです（ローマ 7：7）。律法は私たちに自分の罪を悟らせます（ローマ 3：20、5：20）。そして律法は私たちが死に定めるのです（ローマ 4：15、コリント第二 3：7）。律法だけでは私たちの罪を告発し、罪を裁き、私たちが滅ぼすことしかできません。アウグスティヌスの言葉のように、恩寵の霊がなければ、律法は私たちが告発し、殺すためだけにあると言え

るのです。

もちろん、それでも律法自体が悪いわけではありません。私たちの意志が律法に従うことができれば、律法を知ることだけでも私たちが救いを受けるのに十分なのです。しかし私たちの肉的で腐敗した本性は霊的で聖なる神の律法と常に激しく戦い、懲らしめを受けても決して癒されることはありません。そして私たちがそれに聞き従えば救いを与えると約束している律法ですが、それに従えなければむしろ私たちにとって罪と死の原因になってしまうのです。



しかし、同じ律法であっても神の子供

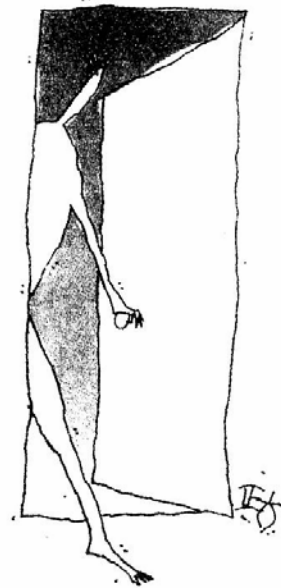
たちにはそれは全く違って効果を表します。神を信じない人たちは頑強な心で律法を拒否するために恐怖心を感じるようになりますが、神の子供たちは律法の約束を見つめ、神の憐みと慈しみを求めるようにされるのです。アウグスチヌスはヒエロニムスに送った手紙で「律法はその要求を満たそうとして疲れて果ててしまっている私たちに恵みの助けを求めようと教える」と語っています。

ローマの教皇インノセント1世(402~417年)に送った手紙では「律法は命令し、恩寵はそれを実践する力を与える」と書いています。またバレンチヌスに送った文章には「私たちができないことを神が命令されるのは私たちが神から求めなければならないものを知らせるという意味がある」と語っています。アウグスチヌスはまた、このように賛美します。「主よ。行わせてください。行うことができないことを命令してください。いえ、あなたの恩寵を受けなければ行うことができないことを命令してください。」

第二の機能は束縛を与えるためです。律法は悪人たちに恐れと恥という束縛を与えて悪を抑制させ、社会を保つ役割を果たします。悪人たちは律法の脅威と圧力を感じなければ、悪を自制することも、正しいことについての関心も全く持ちません。もちろん、悪を抑制させるにしても、彼らは心に何か感動や感化を受けてそのようにするのはありません。ただ恐れと恥が彼らを妨害するために汚れた思いを胸にだけしまって、心に煮えたぎっている情欲をそのとおりにあらわすことがないようにさせるだけなのです(テモテ第一1:9、10)。

しかし悪人の心は自分を抑制しようとするほどさらに情欲は湧き上がり、律法の恐れと恥だけでは押さえ込むことができず、ついに爆発するような仕組みになっています。できるならば彼らは律法はもちろんのこと、神でさえも無くなってしまおうようにと願うのです。しかし、このように抑制され、強制された義でも人間社会を保つためには必ず必要なのです。

神がその救いに選ばれた者たちはいまだに不信仰の中にあるときも律法は養育係となって彼らの内で次のような二つの作用をします。ひとつは仮面を剥ぎ取ること。傲慢をへし折り謙遜にさせて、今までの自分になかったその何かを求めさせ、準備させようとするのです。もうひとつは束縛を負わせます。肉の思い通りに暴れまわらないようにして律法の恐れと恥で抑制させるので



す（ペトロ第一 2：12）。もちろん、この束縛は主の子たちが抱いているまことの恐れや恥ずかしさとはちがいますが、聖霊によって新たにされ神に出会うまで、彼らを保存するのに大変に有用なのです。

三つ目の機能は教訓と忠告を伝えるということです。律法は信じる者たちに教訓を与え、忠告を与えて善を行わせるようにします。神の霊がその内にある人々の心にはすでに神の律法が刻まれています（エレミヤ 31：33、ヘブライ 10：16）。そして信じる者たちは基本的に聖霊の感動を受けてどのようにすれば神を喜ばせられるかということに心を傾けるのです。律法は次のように信じる者たちに二つの面から恵みを与えます。

ひとつは学ばせることです。律法は神とその御心を理解するために有効な道具となります。律法を学ぶなら、私たちは神についての事柄を学び、知恵に不足することがないようにされるのです。もうひとつは忠告を与えることです。信じる者は律法をいつも黙想して服従する熱情を与えられ、神に服従することのできる力を受けて、罪人の道に足を踏み入れないようにされるのです。信じる者は常にこのような方法で前進し続けていくのです（詩 1：2、19：7、8、119：101～105、テモテ第二 3：15～17）。

第4節 律法は廃止されたのか

無知な人々はモーセを捕らえて二枚の石の板を破壊しようとしています。しかし、律法は悪人には情欲の根拠を与えるのですが、信じる者には恵みに至ることのできる唯一で完全な目標を与えるのです（テモテ第二 3：16,17）。ただし、信じる者たちに律法が廃止されているという場合は、罪人に恐怖心を与え、彼らを罪に定めて、破滅に追い込む律法の効力が信じる者には廃止されたという意味です。戒め自体が廃止されたのではなく、戒めの罪に定め、束縛する力が消滅させられたという意味です。なぜ、そうなのでしょう。信じる者が持っている義はキリストの義だからです（ガラテヤ 3：13、4：4,5、ペトロ第二 1：1）。しかし自分自身の義に寄りすがろうとす

る者たちには依然として律法の呪いが働くのです（ガラテヤ 3：10、申命 27：26）

しかし、旧約の儀式律法の場合には少し問題が違います。儀式はその効果が無くなってしまえば、それを行う必要はありません。儀式の効果はイエス・キリストの死と復活によって完成されて、その必要は失われたのです（コロサイ 2：17、マタイ 27：51、ヘブライ 10：1、9：1～15）。旧約の儀式は罪を証言するだけで、その罪を無くさせる力はありませんでした。私たちに訴える厳しい調書でしかなかったのです。イエスは十字架にかかってそれを廃棄してくださったのです（コロサイ 2：13、14）

結びの言葉

律法は養育係となって私たちに訓練させ、指導して、キリストに導きます。律法は神の恵みが無ければ守ることができず、私たちが恵みの内にあってこそ守ることができる完全な基準です。その律法は傲慢の仮面を剥ぎ取り、悪人の行動を抑制させ、信じる者に教訓と警告を教えて善を行うようにさせます。イエス・キリストにおいて、律法は今やその効果が完成され、呪いは廃棄されているのです。